「協働学習空間としての大学図書館の変革」
―グループ学習室の高度化に期待する―

井下（いのした）　理（おさむ）
（総合政策学部教授）

1　「図書の館」から「学習空間」への変革

一般に大学というところはどの大学でもキャンパスのほぼ中央に大学図書館がある。知の殿堂としての象徴的な意味をもつ。そこは教育研究の中心地（センター）としての役割を担っているからで，とりわけ学生にとって学びの重要な空間だからである。

湘南藤沢メディアセンターは，インフォメーションテクノロジーセンター（ITC）と併設され同じ建物となっている。開設当初の24年前から，図書の館という古いイメージの図書館ではない。情報や知識を伝える媒体である「メディア」の中核地として，キャンパスの中央に位置している。デジタル社会においては地理的・物理的位置はそれほど問題にならない。にもかかわらずメディアセンターはキャンパス空間に占める位置とそこでの機能が，大学の活動の中心的なものを担っている。湘南藤沢メディアセンターは，書籍の集積地としてではなく，紙媒体以外の情報や知識の生産や画像・音声も含めた情報の加工・編集・保存といった活動の拠点としてキャンパスの中心地となっている。1階のフロアは24年の間に何度か模様替えを行ってきた。

湘南藤沢キャンパス（以下，SFC）に限らず，今，国内外の大学図書館は，大きく変わろうとしている。利用者である学生や院生の学習行動を支援する諸活動，学生への教育活動，院生・教員に対する研究活動支援などの幅広いサービスが提供され，メディアセンターの機能は拡充し，メディアセンターがもつ存在意義の再定義が進行中だ。

大学図書館は，学生に対して何を提供しているのだろうか。従来のイメージでは，「静かな学びの空間・時間」である。しかし，近年は，「静かな空間」と共に「にぎわいのある空間」との両方が求められている。その「にぎわい」とは何か。それはそこに集う人々の語らいであり，議論であり，協働的な学習過程で生じる「人々の声」である。

そもそも「図書館」という文字からすれば，それは「図書」の「館」を意味するのだが，大学図書館は今や，それにとどまらない。大学という場が，研究と教育の活動拠点として存在する以上，図書館は活動の主体である学生や教員に「学ぶ場と時間」という環境を提供していることになる。大学図書館は，ひとり静かに勉強するだけのところではない。

図書館には図書などの保管庫としての機能だけでなく，人的サービスとしてのレファレンスサービス機能がある。利用者は，先行研究や関連文献を検索し，収集したいときには，データベースを使って簡単に関連する論文や書籍に出会うことができる。

さらにここへきて大学図書館は，従来のように図書を大量に保管しているだけでなく，新規の学習支援活動にもその時間と空間を割いている。従来型のレファレンスサービスはもちろんのこと，PCやAV機器の貸し出し，データベース検索やライティング支援サービス，情報リテラシー講習会など研究支援活動，教育支援活動などを含めて多彩な教育研究及び学習機能を強化している。

館内には情報リテラシー講習会用のセミナールームや個別の学習相談，調査研究方法のコンサルタントをはじめレポートのライティングに関する相談指導などのためのスペースが用意されている，個人に対しても集団に対しても，そこで提供されるサービスの幅は広がっている。

2　協働学習空間としてのメディアセンター

学習行動は本来は一人で静かな時間・空間の中で行うものだ。しかし，ときには学習したことを他者と共に確認したり，お互いの考えなどを交換し，共有しながら，更に学習内容への理解を深め，思考を錬摩する。個人の中だけで完結せず，他者との交流が学習を深め，促進させる。

大学に通う目的は，単に知識を吸収するだけでない。吸収した知識を自分にとって意味ある体系として再加工したり，再確認する。さらに，自分の考え

を発展させて，それを他者と交換したくなる。他者との語らいが功を奏して，予想以上の学びの喜びを経験することが可能となる。そこで，オンラインでのネットではなく直接対面型での議論を通じて，大学に学ぶ意義と意味を再認識することができる。

大学においては，他者との交流は食堂などでも可能であるが，時間によっては混雑が激しく，周囲の騒音や匂いなどで，構想を練ったり，特定の仲間と議論に集中する場としては不適切である。

その点，2, 3時間のまとまった時間を特定の集団で居られる場所として，大学図書館の中の集団学習室への期待が存在する。

3　グループ学習室の環境整備

大学図書館の中に新しい共同学習空間を開設する動きが目立ってきた。日本はむしろその点でやや後塵を拝しているのではないか。

このところ，米国，カナダ，オーストラリア，台湾，韓国など，海外の大学図書館を訪問していてそう感じる。どの国も大学図書館としての共通点がいくつかある。（写真1～3　参照）

写真1.　韓国・延世大学　グループ学習室

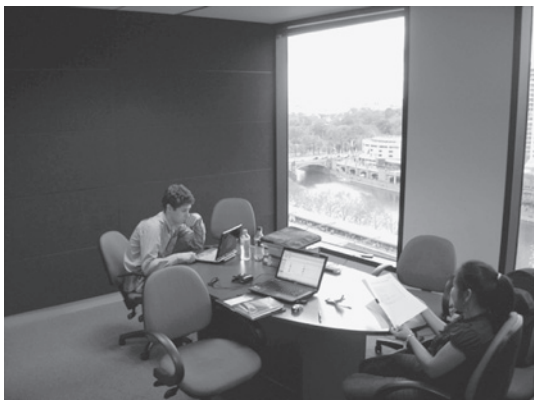

写真2.　オーストラリア・ビクトリア大学
グループ学習室

写真3.　オーストラリア・メルボルン大学
グループ学習室

入口付近のPCの並ぶオープンスペースや，館内での情報リテラシ―教育のためのセミナールーム，大型の分別ゴミ箱の設置，程度の差はあるが館内での飲食の許容,「静かなエリア」と「にぎやかエリア」の区別である。またどこでも必ず少人数で討議やプレゼンテーションの準備などをすることができるガラス張りの防音型の独立した小部屋を設けている。

本稿では，このグループ学習室に焦点をあててみたい。日本でも九州大学の伊都キャンパスの中央図書館や大正大学のラーニングコモンズは，国内における先進事例として注目に値する。（写真4～6　参照）

SFCのグループ学習室は，メディアセンターの2階と3階にある。フロアの他の空間とはガラスの間仕切りがあり，人の話し声が外部に漏れないようにはなっている。グループ学習室の利用者が，安心してそこでの議論に集中できるように設計されている。

写真4.　九州大学　伊都キャンパス
Learning & Community Space

写真 5.　九州大学　伊都図書館

写真 6.　大正大学　ラーニングコモンズ

しかしながら，一定のレベルでは利用者の立場を考慮した設計がなされているとは言え，SFC の場合，実はグループ学習室の利用者から見るとまだ改善点がありそうだ。

その第 1 は，グループ学習室の中にグループの間の相互干渉への工夫が不足している点である。グループ学習室と外部との間の仕切りはあっても，グループ学習室内でのグループ間の間仕切りがないのだ。そのため利用者グループは，他のグループの討議する声に影響を受けざるを得ない状態となっている。利用者の利便性，グループ学習室の利用価値を高めるためにもこの点の改善は急務である。

第 2 は，グループ学習室の利用予約方法の改善である。現場での優先来場者を尊重する現在のやり方にも一理あるが，好ましいのは Web による事前予約可能な仕組みである。その時点でのリアルタイムでの現在の利用状況を Web で即座に知りうる方法の開発が期待される。グループ学習室の利用者は，いきなりグループ学習室を訪れるとは限らない。グループ学習が必要となった時，可能な空間を求めて，空き教室や食堂などの類似空間を放浪する。その時間を節約できることがオンラインでのリアルタイム予約に期待される。

SFC における学習形態・教授法としての「グループワーク」の普及によってその部屋の利用率は高くなる。

物理的な施設設備を充実させても，そこにいる学生たちがその利点を見出さなければ，その施設設備は利用されず，稼働率も低い。その点，グループ学習室は，利用頻度の高い施設となりうる。

観点を変えると，利用ニーズが高い割には，現状の施設はお粗末と言わざるを得ない。ホワイトボードや電源コンセントなどはどの机の周囲にも配備されているとはいえ，そもそもテーブルを囲んで学生たちがグループワークをする際のお互いの声が，聞こえる。グループ学習室自体は，ガラスで図書館の内部とは仕切られていて，音が漏れない状態にはなっているが，中では，複数のチームが同時利用している現状では，お互いの討議の声が邪魔になる。

SFC では教育理念として，慶應義塾の「独立自尊」「半学半教」「躬行実践」に加えて，「問題発見・解決型の教育」「学習者の主体的・自発的学習の尊重」「協働によるグループワーク型・プロジェクト型」教育・学習方法を重視してきた。

せっかくの理念や方法をさらに活かすための空間の再設計，特にグループ学習室の一層の充実に期待したい。